

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 5 年度病害虫防除情報第 1 4 号

ピーマンのアザミウマ類の発生状況についてお知らせします。
各地域の発生状況を把握しながら適切な防除指導をお願いします。

**アザミウマ類の発生量が多くなっています。
今後の発生状況に注意し、適期防除に努めましょう。**

1. 作物名 ピーマン

2. 病害虫名 アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）

3. 発生状況

1) ミナミキイロアザミウマ

- (1) 12月中旬の巡回調査における発生状況は、発生面積率が92.3%（平年53.8%）で平年に比べ多、10花当たり寄生虫数が3.6頭（平年2.4頭）で平年に比べやや多、50心当たり寄生虫数が11.6頭（平年3.9頭）で平年に比べ多となっている。
- (2) 発生量の推移としては、発生面積率、10花当たり寄生虫数ともに10月から12月にかけて急激に拡大・増加している(図1、2)。

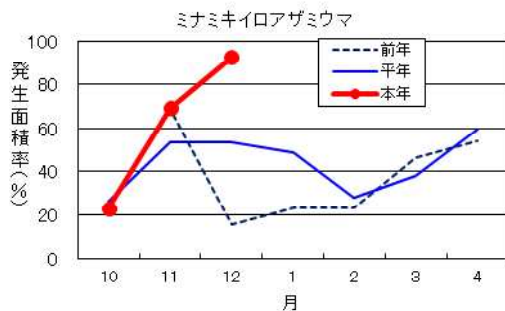


図1 ミナミキイロアザミウマの発生面積率の推移

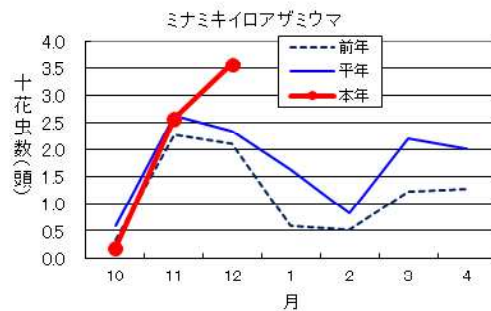


図2 ミナミキイロアザミウマの寄生状況の推移

2) ヒラズハナアザミウマ

- (1) 12月中旬の巡回調査における発生状況は、発生面積率が61.6%（平年30.5%）で平年に比べ多、10花当たり寄生虫数が5.4頭（平年3.6頭）で平年に比べやや多となっている。
- (2) 発生面積率は、ミナミキイロアザミウマと同様に10月から12月にかけて急激に拡大している（図3）。10花当たり寄生虫数は、11月から12月にかけて平年より高くなっている（図4）。

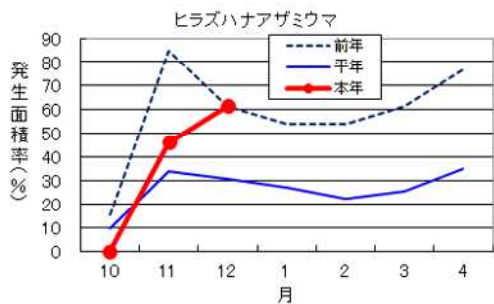


図3 ヒラズハナアザミウマの発生面積率の推移

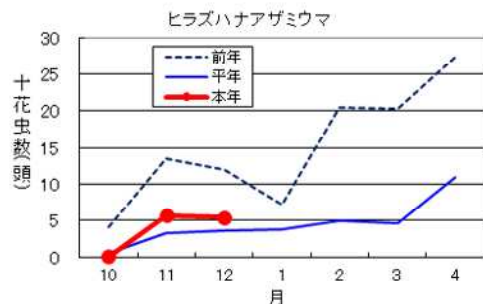


図4 ヒラズハナアザミウマの寄生状況の推移

4. 防除上の注意

1) 多発生後の防除は困難となるので、下記のポイントに留意し、総合的な防除を行う。

ヒラズハナアザミウマは花に、ミナミキイロアザミウマは花や生長点付近に生息し、いずれも青色粘着板等に誘引されるので、粘着板等を設置し密度低下に活用するとともに早期発見に努める。

いずれのアザミウマも繁殖力がきわめて旺盛で、多発生時には卵～成虫まで各ステージが混在し、防除が著しく困難となるので、発見次第早期防除を徹底する。密度増加時には、薬剤散布後に発生(孵化、羽化)する幼虫・成虫に対しての追い打ち防除のため、最少でも7日間隔で3回の連続防除を実施する。

アザミウマの種類により効果のある薬剤が異なるため、ほ場内に発生するアザミウマの種類を確認し、効果のある薬剤を選定する。

ヒラズハナアザミウマは花を中心に生息するので、花の少ない時期に薬剤を散布すると防除効果が高い。

抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤のローテーション散布に努めるとともに、天敵等による生物的防除を組み入れるなど総合的な対策をとることが必要である。

捕食性天敵は主にアザミウマ類幼虫を捕食するため、ほ場内の成虫数が多いと天敵の効果が十分に発揮されないことが考えられる。そのようなほ場では、アザミウマ類成虫に効果のある微生物殺虫剤等を併用するなど、成虫を含めたアザミウマ類の減少に努める。

天敵等を利用しているほ場で化学農薬を使用する場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選定することが望ましい。発生が少ない時期にはIGR剤などが天敵に影響が少なく効果的であるが、他の薬剤に比べ効果発現に時間を要するため、防除後一定期間は経過観察をし、効果を確認する。

アザミウマ類に効果の高い薬剤(ヒラズハナアザミウマではスピノサドなど)は天敵に対して影響が大きいが、多発生しているほ場では天敵による防除効果には限界があるので、必要に応じて防除効果の高い薬剤を散布する。

被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチの導入(本虫の土中や地表面での蛹化を防止)により密度低下をはかる。

5. その他

1) その他詳細については、西臼杵支庁・各農林振興局(農業改良普及センター)、総合農業試験場生物環境部、病害虫防除・肥料検査センター等関係機関に照会してください。

2) 農薬散布にあたっては、ラベル表示の確認を十分に行い、農薬使用基準を遵守し、危害防止に努めましょう。

《連絡先》

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 壹岐

TEL :0985-73-6670 FAX :0985-73-2127

E-mail : byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp

ホームページ : <http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki>